The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 群馬　正宗白鳥『浅間登山記』 ： 人間を観る登山記 |
| Author(s) | 斎藤, 理生 |
| Citation | 国文学解釈と鑑賞. 2007, 72(4), p. 77-79 |
| Version Type | AM |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/56991 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 人間を観る登山記
## ――正宗白鳥「浅間登山記」

斎藤　理生

**[初出]**

「人間」第二巻第七号（大正九年九月）の「小説」欄に発表。

**[梗概]**

軽井沢の避暑客であれば一度は浅間山に登るのが常例であると知りながら、「登山慾」を持ち合わせていない「私」はこれまで登りたいとは思わなかった。しかし新聞記者の「M君」から強く勧められ、また敬愛する学者の「Tさん」も一緒に行くと知って、登ることを決意する。一行は深夜に出発する。だが道行きは「M君」が事前に言っていたほど楽ではなく、早朝まで雨に降られ、濃霧にも襲われ、ようやく噴火口にたどり着いても寒気に苦しめられ、景観を味わうどころではなかった。結局「私」たちは「一時間くらゐ」で下山する。「私」は高山植物が茂る温かな山の裾近くまで下りて来てからようやく「山上を顧みると、焼石の累々たる噴火山も、凄くも怖くもなくなつて、姿の滑らかな柔しい山として私の目に映つた」と述べる心の余裕を取り戻す。途中の峰の茶屋で渋茶を飲んで少し休息した後、往路とは異なる、小瀬を経て軽井沢に到るルートを選ぶ。帰り道を急ぐ「Tさん」のためであったが、この道も当初「M君」が言っていた以上に険しかった。小瀬までたどり着いたとき、「私」は空腹に堪えかねたこともあり、「M君」や「Tさん」とは別れて、二人の学生と共に近くの温泉宿に向かう。そこで昼食をとって少し休息した三人は、満員の軽便鉄道の汽車に乗って軽井沢に帰る。

**[作品の舞台]**

浅間山の登山コースには一般に「東側の峰ノ茶屋から登るコースと、西側の一ノ鳥居からと南側の追分原にある血ノ池から登るコースがある」が、「峰ノ茶屋（標高一四〇五メートル）からのコースは北軽井沢・中軽井沢・嬬恋から入るのに便利であるし、頂上まで三時間ぐらいで登ること

ができるので、利用者が多い」（川崎敏『浅間―歴史・文学・地誌―』（木耳社、昭和四十九年六月）。「浅間登山記」の「私」も軽井沢を出発して、峰ノ茶屋から浅間山の頂上に至っている。

**［地名］**

浅間山は「群馬県嬬恋村と長野県北佐久郡軽井沢町・御代田町、小諸市にまたがる第四期複合成層（三重式コニーデ）型の活火山で、標高二五四二メートル」（『日本歴史地名大系第一〇巻　群馬県の地名』平凡社、昭和六十二年二月）。日本有数の活火山として有名であり、山頂部の釜山は現在も活動中である。古くから人々を惹きつけ、信仰の対象とされたり、和歌に詠まれたりしたことも少なくない。

浅間山の地名起源には諸説があり、定説を見ない。「富士浅間神社の祭神この花さくや姫を祭ったので浅間―あさまといったとか、梵（ぼん）語の火に由来するとか、高所の山のため遠大であることがわからないことから、浅間（近間）の山という（和訓栞）説もある。寺田寅彦はマレー半島などの火山の名が、アス、アソ、アサという系統が多いことから、黒潮に乗って移動した民族が日本の火山にも同じ名をつけ、阿蘇、浅間と称したのではないかと推論している」（萩原進「浅間（あさま）山」『群馬の地名―郡名から大字名まで』みやま文庫、昭和四十六年十二月）。

**［評論］**

「浅間登山記」は、初出では「小説」欄に発表された。だが新潮社版の全集では随筆として、福武書店版の全集では小説として収録されている。確かに小説とも随筆とも受け取られる内容の作品ではある。だがいずれにせよ、冒頭で噴火口の強い寒気に辟易する場面を描いた後、どのような経緯で浅間山を登ることになったかが語られ、登ってゆく過程、再び噴火口、そして下山する場面へと展開してゆくこの作品が、場面構成による効果を十分に意識して書かれていることは間違いない。

一篇は、登山に関心がなかった人物による登山記、という形式であるがゆえに、浅間登山について取り立てて細かな情報は含んではいない。だがそのぶん一般の読者に親しみやすい内容になっていると言えよう。後に深田久弥の『わが山々』という「登山記録集」を称賛し、逆に「あまり玄人染みた登山家のは、我々には案外面白くない」（「登山趣味」、「讀賣新聞」昭和十年二月二日）と述べた白鳥らしい登山記である。

語り手「私」は、浅間山の景観以上に周囲の人々に目を向けている。冒頭の噴火口の場面から、「私」は噴火口の内部や頂上からの展望よりも、「頑丈な案内者のM君」が「頻りに調子づいた口を利」くさまや、「同行の理学士のS君やK君や二三の学生やT氏など」や「人品のいゝT氏」らの様子をうかがうことに熱心である。登山前にも、登山帰りの人々を見て「登山慾」について思いを巡らせていたし、登山中も、すれ違う人々の姿や言葉に注意している。逆に浅間山そのものの描写は淡泊であるし、そこで抱いた感想もあまり語られていない。白鳥じしんは、後年の随筆で「浅間と阿蘇とヴエスバイアスの三噴火山には登つてゐるが、私の心に感銘されてゐるのは、下界とちがつて空気の爽かなことである」と述べているが（前掲「登山趣味」）、「浅間登山記」の「私」は、浅間山の空気をどのように感じたのかについて特に語らない。

「私」が観察するそれら周囲の人物たちは、しばしば対照的な姿を見せる。たとえば、浅間登山／下山における「M君」と「Tさん」である。「M君」は、本人に悪気はないものの、「無遠慮」で「得意げ」で「安受合ひ」で、時に同行者を困らせる難儀な人物である。一方「Tさん」は、落ち着いて品格があり、予定している帰りの汽車に間に合わないかも知れない心の焦りも表面には出さない。また、二人と別れた後に乗った軽便鉄道の三等列車でも、「高慢」な乗客たちと無言の外国人、あるいは、五倍子の呼び方や用途をもっともらしく語る乗客たちと、知っていても大きな顔をして会話に介入したりせず、「私」にだけささやく学生が合わせて描かれている。ただし「私」はそうした人間模様を少し離れた位置から眺めることに徹しており、ことさらに批評じみたことを述べるわけではない。

なお、「私」は「排日」運動に対抗するように外国人に厳しく当たる汽車の乗客を見て、「洋行などしたくないやうな気持がした」と述べている。だが正宗白鳥は、九年後の昭和三年には世界漫遊の旅に出て、翌年にはイタリアのベスビオ火山に登っている。それらについて語った随筆になると、白鳥も、旅先の風景に無関心ではなくなっているように見受けられる。しかし「浅間登山記」は、あくまで「自然よりも人事に興味を有つてゐた」（『文壇的自叙伝』中央公論社、昭和十三年十二月）時期の白鳥にふさわしい作品になっている。

（さいとうまさお・群馬大学専任講師）